

漢字による才能開発

三歳からの才能開発

石井 勲

まえがき

昭和四十三年の四月、大阪のいくつかの幼稚園で始められた石井式漢字教育は、その後の二年間に全国に広がり、今では二百余の幼稚園・保育園で、何万人という園児に行われるようになりました。

このように発展したのは、直接には、いろいろな新聞や雑誌やテレビに取り上げられて評判になったためですが、根本的には、この漢字教育が簡単に実施できて、しかも実施して見ると、その効果が目に見えて大きいことがはっきりしたからだと思います。たと

えば――

漢字による才能開発

昭和四十六年から改定になる小学校の教科書では、六年生で、**宇宙・内閣・県庁・郵便・裁判・警察**などの漢字がようやく登場します。また、**腹・胸・肩・背**など、きわめて日常

的な漢字も、今度初めて六年生で習うことになりました。ところが、こうした、いままでは中学生にならなければ出てこなかった漢字を、石井方式の漢字教育でつけられている園児たち、つまり幼稚園や保育園の三〜四歳の子供たちは、実に自然にすらすらと読んでいるのです。

言いかえますと、中学校で初めて習うようなむずかしいと考えられている漢字も、教える方一つで、三〜四歳の幼児がなんの苦もなく覚え、そして楽しんで読んでいるということなのです。

さて私どもが、何万という幼児に対する指導をした結果、日本の子供が最も自然に漢字を覚える時期は、小学校へ上がってからではなく、三〜四歳の幼児期であることが、いまは明らかになっております。

現在、中学生の読める漢字数は、平均五百字ぐらいだと言われていますが、これは、小学校一年から計算すると、九年間の教育の結果です。この長い学習期間に覚える程度の漢字でしたら、小学校へ上がるまえに、らくに読むようになります。

では、そんなに早く漢字を覚えてしまった子供たちには、どういうことが起こるでしょうか。

現在、子供たちはテレビや漫画ばかり見て、本を読まないということがしきりに言われております。ところが漢字を覚えた幼児たちは、わたしたちおとなが呆れるほどむずかしい本を読む——食いつくのです。そういう本が、テレビや漫画に劣らずおもしろいのでしよう。

つまり、漢字を知っていることで、ほかに特別な配慮をしなくても、読書好きな、読書能力の高い子供に育つのです。そうして、このように育った子供は、おとなにあれこれ言われなくても、自分の道を切り開いていく能力を身につけます。

とはいえ、現在義務教育を担当している人の多くは、小学校でさえかな文字を足えることから始めているのに、漢字を幼児に教えるなど……という意見が強く、したがって、幼児への漢字教育は、その是非論の方が先に立って、実行はなかなかされません。ですから、いまあげたような効果があるにもかかわらず、それがわからないまま、むしろ非難の声が発せられています。

なにによらず、新しいことは、すべて通念や常識を破るものですし、通念・常識を破ることに対しては、必ず大小の抵抗・非難・攻撃が待ち構えているのがつねです。

けれども、その新しいことが真実で有効なものならば、そうした抵抗・非難・攻撃によって鍛えられ、一層い確固としたものになっていくのだと思います。

育つべき子供の能力を、大人の無知によって圧殺することは許されません。子供は、最も適した時期に、最も適した教育をされなければなりません。漢字教育もまたその例外ではないのです。このことの重大さを痛切に知っていたために、わたしどもの石井方式の漢字教育——漢字による幼児教育法を、第一部「漢字は才能を開発する」第二部「漢字をどう教えるか」第三部「やさしい漢字のおぼえ方」の三つに分けて、ここに述べました。幼児のしつけの大部分は、いうまでもなく、両親ごとにお母さんによってなされています。しかもこの家庭教育は、誰からも侵されない聖域の仕事です。漢字教育も思う存分に行えます。わが子への愛と責任と抱負を抱いて真の努力をなさるお母さん方のために、わたしはここに書いた体験的事実が、より大きく奉仕してくれるように祈っております。

二〇〇一年九月